

広島大学における留学生指導の現状と課題

—留学の動機を中心にして—

田 畑 佳 則
田 中 共 子

<序>

近年、わが国の高等教育において見受けられる顕著な傾向の一つは外国人留学生の増加である。文部省の統計によれば、1980年にわが国の高等教育機関で学ぶ留学生の数は7千に満たなかった。しかし、1983年の「21世紀への留学生政策懇談会」の提言に基づいて、21世紀初頭までに外国人留学生の数を10万人にまで増やすという、いわゆる留学生10万人計画が推進されるにつれて留学生数は急増する傾向にあり、1990年にはその数は4万を超えるにいたっている。この傾向は広島大学においても例外ではなく、特に1985年以降顕著である(図1)。ただ、広島大学の場合もそうであるが、留学生にみられる傾向として、国立大学の場合は私立大学の場合に比して大学院学生および研究生の割合が高く、学部学生の割合が非常に少ない。また、国費留学生の割合が高いのも国立大学の場合の特徴であろう。因みに1991年の広島大学の場合をみると、留学生491名中大学院生は252名(51.3%)、研究生184名(37.5%)、学部生29名(5.9%)、日本語研修生26名(5.3%)で、その内国費留学生が213名(43.4%)、外国政府派遣留学生は18名(3.6%)、私費留学

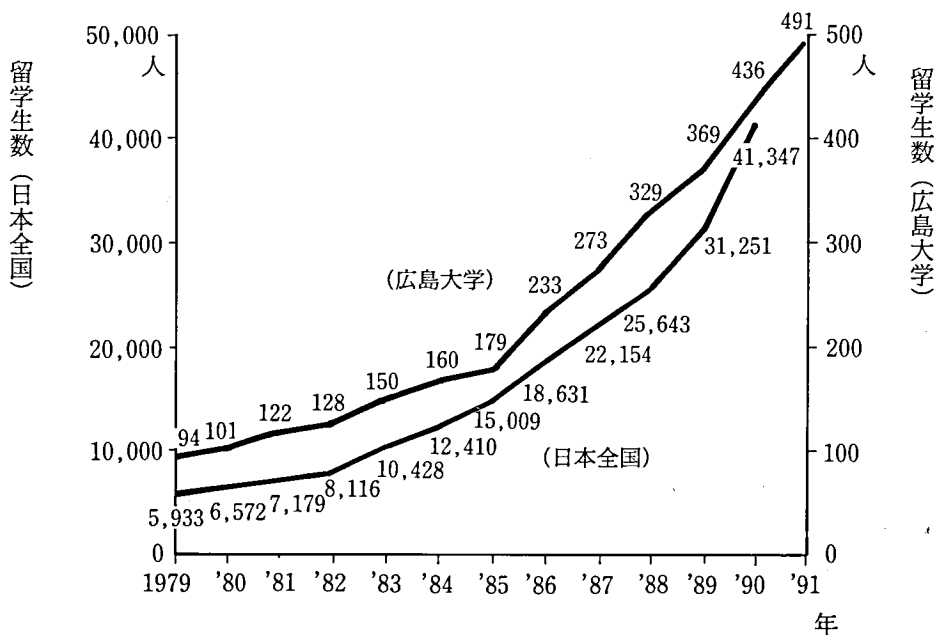


図1 日本全国および広島大学における外国人留学生数の推移(5月1日現在)

生は260名(53.0%)となっている。これまでの傾向として、広島大学の場合、学籍別にみた留学生の割合には大した変化はみられないが、私費による留学生の割合が次第に増える傾向にある。

ところで、わが国は留学の対象として、それほど魅力がある国なのであろうか。この点に関して岩男・萩原(1988, pp. 6-7)は、アジアの人たちにとって、欧米への留学に比して日本への留学が人気がない理由として、「英語などに比べて日本語は国際的な通用性にかき、それを母国で学習したり使用する機会が乏しい。日本の大学で得た学位は欧米の学位ほど母国で高く評価されない。特に文科系の分野では日本で博士号を取得するのが極めて難しく、また教育内容や指導体制の面でも日本の大学は欧米の大学ほど充実していない。物価の高い現在の日本で生活するには経済的負担が大きく、特に居住条件が劣悪なため欧米ほど恵まれた生活環境を期待しにくい。外国人に対する日本社会の閉鎖性や排他性が留学生の日本での生活への適応を困難にしている」といったものを挙げている。これらの点が日本への留学があまり人気がない理由として挙げられるわけであるが、では、留学生を受け入れている側の対応はどのようなのであろうか。この点に関して江淵(1990)は留学生の受入れ体制についての全国の大学への調査から、留学生への組織的対応、福利厚生、各種支援体制といったサービス面での積極的取組み姿勢は評価されるとしながらも、大学間較差が著しい点や、教育指導面で「未熟」であるにもかかわらず、改善への関心が低い点などについて指摘している。これらの問題への対策として、日本語教育の整備・充実、宿舎の確保、相談・指導態勢の整備、奨学金プログラムの拡充といった、主としてハード面への対応が各省庁、大学、地方自治体、経済団体等の協力のもとに官民一体となって進められてはいるが、それもまだ緒についたばかりという状況である。しかし、国際社会における日本の地位が上昇するにつれて、わが国への留学希望者は着実に増えつつあるし、今後も増え続けると考えられる。

では、彼らは一体いかなる動機で日本へ留学してくるのであろうか。外国へ留学する場合、その動機にはいろいろあると思われるが、一般的には「自国よりも進んだ学問・技術を身につけたい」とか「異なった文化・社会への関心」といったものであろう。この点に関して、岩男・萩原(1988, pp. 222-223)は、欧米諸国からの留学生は「日本やアジアに関する学問分野を専攻した」、「日本が好き」、「以前日本に来たことがある」といった日本への個人的関心から来日する傾向があるのに対して、アジアからの留学生は「自分の専門分野での日本の学問・技術水準が高い」、「奨学金がもらえた」、「自国との文化的類似性や地理的距離の近さ」といった便宜的な理由から日本を留学先とすることが多く、また、韓国、台湾、中国の場合には、同じ漢字文化圏であることが日本留学を促進する条件となっており、それ以外のアジア諸国の場合には、条件の良い文部省の奨励金が最大の誘因となっていると指摘している。

来日の動機や目的によって留学生の関心の対象は大きく異なるであろうし、またそれに

よって留学生活における適応の度合いも異なると考えられる。したがって、彼らがいかなる動機で日本へ留学してきたか、また広島大学へ入学したか、そして、それがどのように後の留学生活に反映されているか、また留学生達がいかなる問題に直面し、いかなる面で悩んでいるかなどについて知ることは留学生に対して修学上および生活上の指導を行っていく上で有益であろう。

本研究では、広島大学に在籍している留学生達がいかなる動機で日本へ留学してきたのか、またいかなる動機で広島大学に入学したのかについて明らかにし、日本留学の動機および広島大学入学の動機が彼らの留学生活に対していかなる影響を及ぼしているかについて明らかにしようとする。この目的のために、日本への留学の動機および広島大学への入学の動機と留学生活における適応とがいかなる関係にあるのかを、「現在の悩み」と対応させることにより明らかにしていきたい。「悩み」は個別にあげてチェックさせるが、ほかに総合指標として留学生活に対する満足度を聞く。また、健康状態との関係も調べてみる。また、広島大学に在籍している留学生達が広島大学に関してどのような違和感を感じやすいのかについて知る手がかりにするために、「出身国の大学と日本の大学とを比べて最も違っている点は何か」について記述してもらう。そして最後に「広大に望むこと」を自由に記述してもらうことにより、留学生達が広島大学に対してどのようなニーズをもっているかについても明らかにしていきたい。

<方 法>

調査対象者：調査は1991年10月中旬から下旬にかけて行われた。日本語および英語版の質問紙が広島大学に在籍する外国人留学生505人に学内便で郵送され、152人が同封した返信用封筒によって回答を返送した（回収率30.1%）。回答の不備1を除いた有効回答数は151であった。

質問紙：質問紙は日本語で構成された後、広島大学留学生センターにおいて英訳された。また、日本語版には全ての漢字にふりがながつけられた。

質問項目のうち、日本への留学の動機と広島大学への入学の動機については、事前の留学生および留学生教育関係者へのインタビューに基づいて設定した。現在の悩みについては、『広大生はいま』（広島大学学生委員会・厚生委員会、1990）を参考にした。設定した項目は以下の通りである。

1. デモグラフィック・データ：1. 性別、2. 年齢（①19才以下、②20～24才、③25～29才、④30～34才、⑤35才以上）、3. 出身地（①東アジア：中国・韓国・台湾・香港、②東南アジア・南アジア、③西欧：ヨーロッパ・北米・オセアニア、④中南米、⑤中東・アフリカ）、4. 専攻（①理科系、②文科系）、5. 学籍（①学部生、②大学院生、③研究生・日本語研修生・教員研修生・日本語日本文化研修生）、6. 滞日年数（①1年未満、

②1年以上2年未満、③2年以上3年未満、④3年以上)、7. 日本語力 (①初級：日常会話にも困難がある、②中級：日常会話程度、③上級：日本語で行われる授業についていける)、8. 居住地 (①広島市、②東広島市、③その他)、9. 住居 (①留学生だけの寮、②日本人と一緒に大学の寮、③県営・市営住宅や民間会社の社宅、④民間のアパート、⑤貸間、⑥その他)、10. 同居人の有無 (①一人で、②家族と、③外国人と、④日本人と)、11. 奨学金の有無 (①日本政府の奨学金、②自国政府の奨学金、③その他奨学金、④奨学金なし)、12. 経済状態 (①たいへん苦しい、②やや苦しい、③ふつう、④やや余裕がある、⑤たいへん余裕がある)。

2. 日本留学の動機：①日本語を修得したかったから、②日本や日本語に関する研究をしたかったから、③日本の文化や社会への興味があったか、④日本における専門分野のレベルや研究内容がよかったから、⑤外国で学んだり生活したりしたかったから、⑥奨学金が受けられることになったから、⑦夫や妻が日本にきたから、⑧その他 (自由記述) の8項目から、当てはまるものを複数回答。

3. 広島大学入学の動機：①興味のある学部、学科、研究テーマがあったから、②友人、知人、親戚などが在学していたから、③文部省に指定されたから、④出身大学と広島大学の間に交換留学の協定があったから、⑤「広島に」興味があったから、⑥その他 (自由記述) の6項目から、当てはまるものを複数回答。

4. 現在の悩み：①成績・単位・研究・学位、②入試、③就職、④人生の目的や意義、⑤異性・恋愛、⑥友人・人間関係、⑦日本語、⑧ホームシック、⑨経済状態・アルバイト、⑩日本と自分の国の文化や習慣の違い、⑪日本人の外国人に対する偏見や特別視、⑫その他 (自由記述) の6項目について、当てはまるものを複数回答。

5. 日本での生活における問題の重要性：Diggsら (1991) の、アメリカ社会における日本人の適応の問題についての研究を参考に、次の13項目を設定した。(1)日本語が不自由、(2)大学への適応、(3)社会生活への適応、(4)交通の便、(5)これまでなじみのなかった日本の文化や習慣、(6)自国語の本や雑誌・新聞がない、(7)周囲の様子がよくわからない、(8)親しい友人がいない、(9)本国の家族がいない、(10)いつまで日本にいるか予定がたたない、(11)ひま・つまらない、(12)本国内で慣れた食べ物がない、(13)本国内で慣れた祭やお祝いごとや行事がない。これらの項目について、①まったく重要でない、②やや重要でない、③ふつう、④やや重要である、⑤たいへん重要であるの5段階で評定。ほかに出会った問題や最も重要だった問題などについてもたずねたが、それらを含む日本での生活における問題に関する解析は別の報告に詳しい (田中・田畑、印刷中)。

6. 留学生活の満足度：「留学生活全体にはどのくらい満足していますか」という設問に対して①たいへん不満足、②やや不満足、③ふつう、④やや満足、⑤たいへん満足、の5段階で評定。

7. 現在の健康状態：①あまりよくない、②ふつう、③良好の3段階で評定。

8. 日本の大学と自国の大学と比べて最も違っていること：自由記述。

9. 広島大学にのぞむこと：3つまで自由記述。

<結 果>

回答者の属性と内訳（カッコ内は%）を図2から図4に示す。回答総数と人数の合計との差は無回答の人数を表している。

属性による内訳は図2-aから図2-1に示した通りである。年齢的には20代後半から

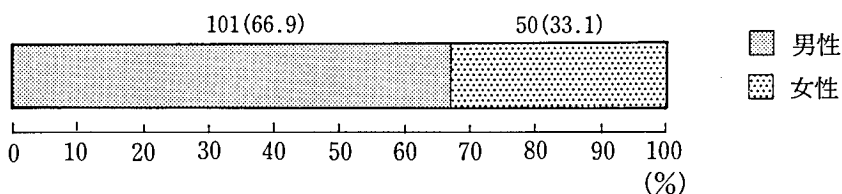


図2-a 性別 数字は人数，()内は%

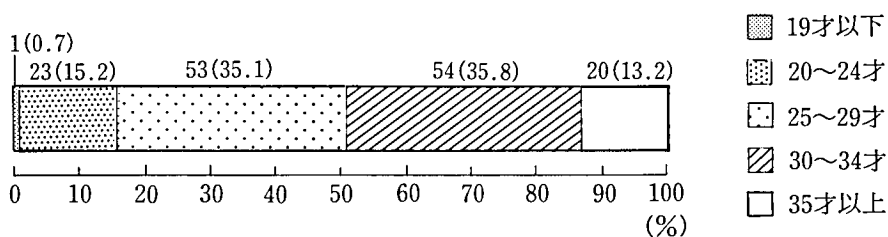


図2-b 年齢 数字は人数，()内は%

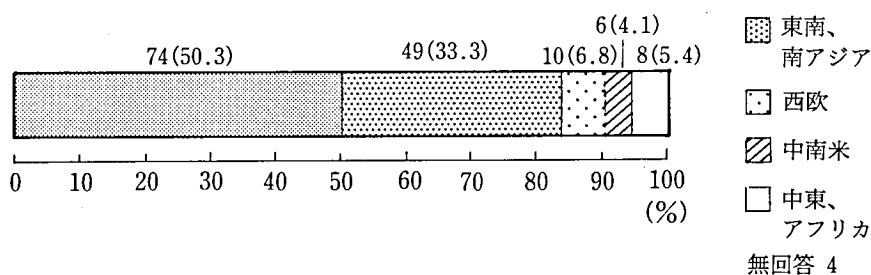


図2-c 出身地域 数字は人数，()内は%

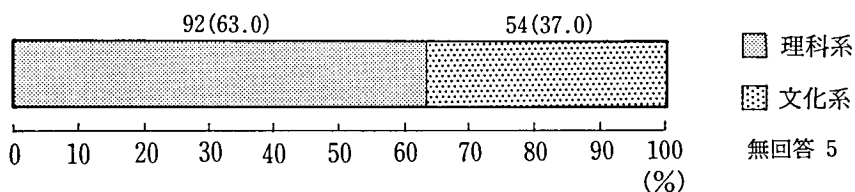


図2-d 専攻 数字は人数，()内は%

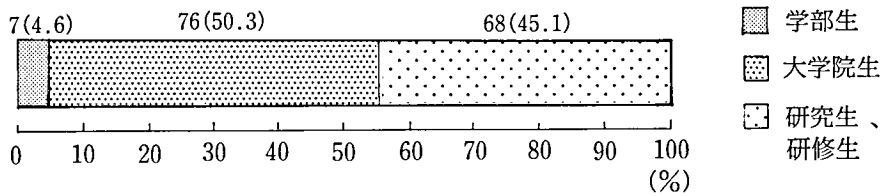


図2-e 学籍 数字は人数，()内は%

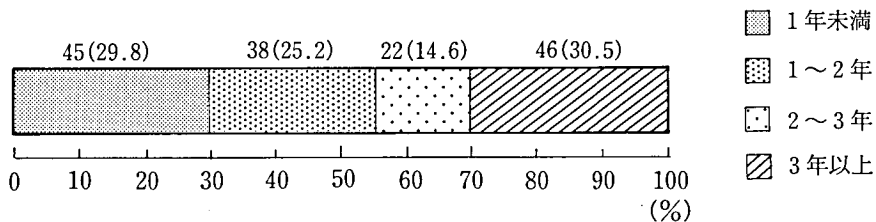


図2-f 滞日年数 数字は人数，()内は%

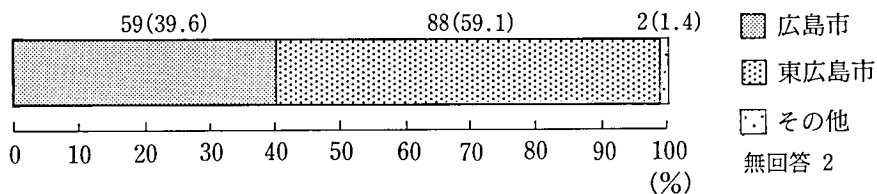


図2-g 居住地 数字は人数，()内は%

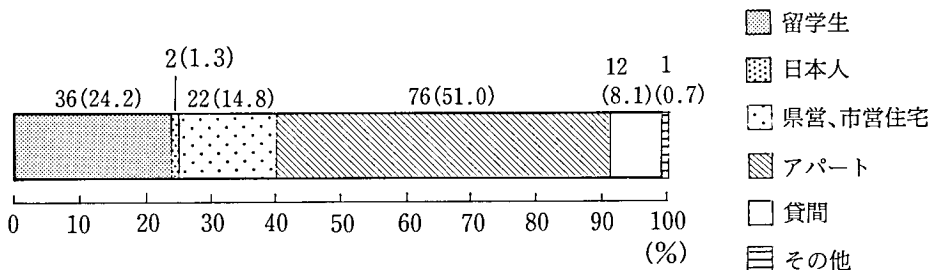


図2-h 居住の種類 数字は人数，()内は%

30代前半が全体の7割を占めている。出身地域の構成は、中国・韓国・台湾・香港のいわゆる漢字圏が約半数で、アジア地域全体では8割強になる。これは現在の日本全国の留学生の出身地に関する割合と、ほぼ類似している。居住地は、6割が東広島、4割が広島である。住居についてみると、2分の1がアパートに住んでおり、4分の1が大学の宿舎に住んでいる。家族と同居しているものは、全体の約3割である。奨学金に関しては、日本政府または自国政府の奨学金を受けているものが7割にのぼっている。経済的には「ふつう」または「余裕がある」とした者が7割である。

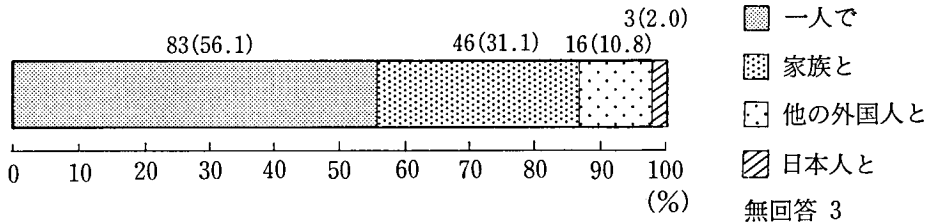


図 2 - i 同居人の有無と種類 数字は人数, () 内は%

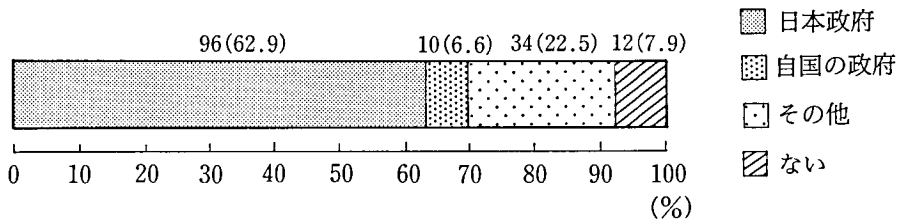


図 2 - j 奨学金の有無と種類 数字は人数, () 内は%

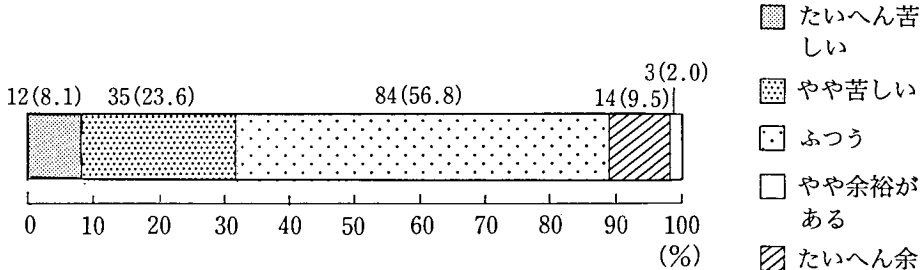


図 2 - k 経済状態 数字は人数, () 内は%

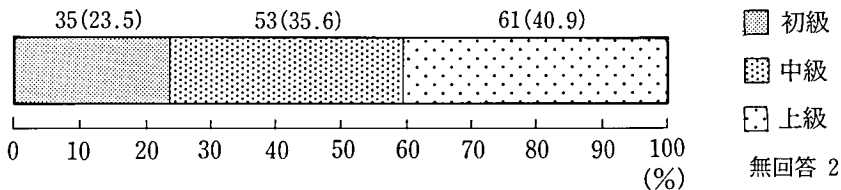


図 2 - l 日本語力 数字は人数, () 内は%

健康状態 (図 3) と、留学生活全体の満足度 (図 4) についての評定を次に示した。留学生活に「たいへん満足」または「やや満足」と答えた者は約 3 割、「たいへん不満足」または「やや不満足」と答えた者は約 2 割である。

出身地域、居住地域、住居、同居人、奨学金と、年齢、滞日年数、日本語力、経済状態、健康状態、満足度との間の分散分析の結果を表 1 に示した。東アジア (漢字圏) の学生は滞在期間が長く日本語力も高い。また、日本人と同居している者に留学生活の満足度が高い者が多い。

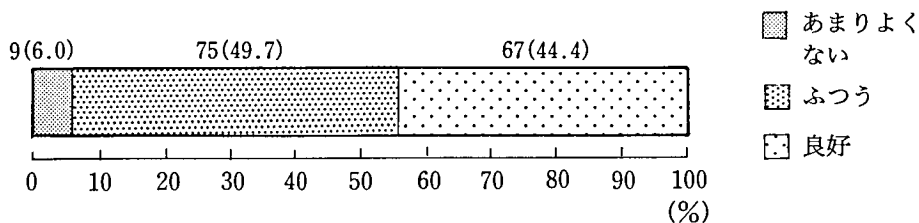


図3 現在の健康状態 数字は人数, ()内は%

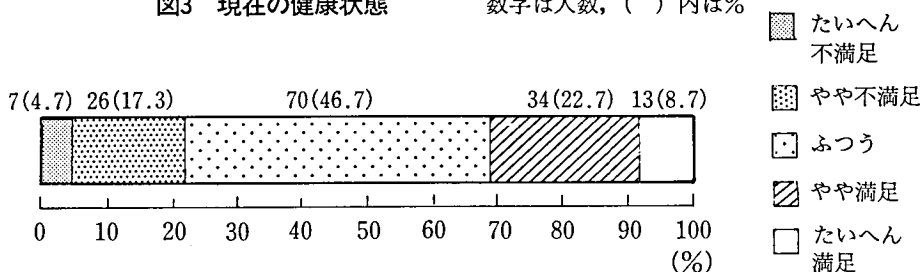


図4 留学生生活全体の満足度 数字は人数, ()内は%

無回答 1

表1 各項目の分散分析の結果

	年齢	滞日年数	日本語力	経済状態	健康状態	留学生生活の満足度
出身地域		東アジア・中東 >中南米	東アジア> 東南アジア・西欧 ・中南米・中東			
居住地域						
住居						
同居人						日本人> 単身・家族 ・外国人
奨学金の種類						

分散分析で有意な結果がえられた組み合わせについて、ダンカン法による下位検定を行った結果を示す。

日本に留学した動機については図5に示す。複数回答で選択された数を動機ごとに集計したところ、「専門分野のレベルや研究内容がよかった」が最も多く、半数あまりの者が選んだ。一人あたりの回答数は平均2.03個である。一つしか回答しなかった者は75人いるが、その中では「専門分野のレベルや研究内容」(41人)が最も多く、回答者全体の約3割を占めていた。単数回答で次に多かったのは「奨学金が得られたから」8人、ついで「日本文化への興味」7人、「外国生活の体験」6人、「日本研究」6人、「日本語」1人であった。また、「その他」の動機(カッコ内は人数)としてあげられたのは、教授の紹

介(1)、本国政府の指示(1)、日本の大学にだけ受け入れられたから(1)、日本は漢字圏の国だから(1)、日本人のマナーが好き(1)などであった。

デモグラフィック要因と日本留学の動機との関連を表2-aと表2-bに示す。文科系の学生は、「日本語」、「日本文化」および「日本研究」への動機づけが高い。研究生は、「日本語」、「日本文化」および「外国生活の体験」への関心が高い。大学院生の「日本語」や「日本文化」に関する動機

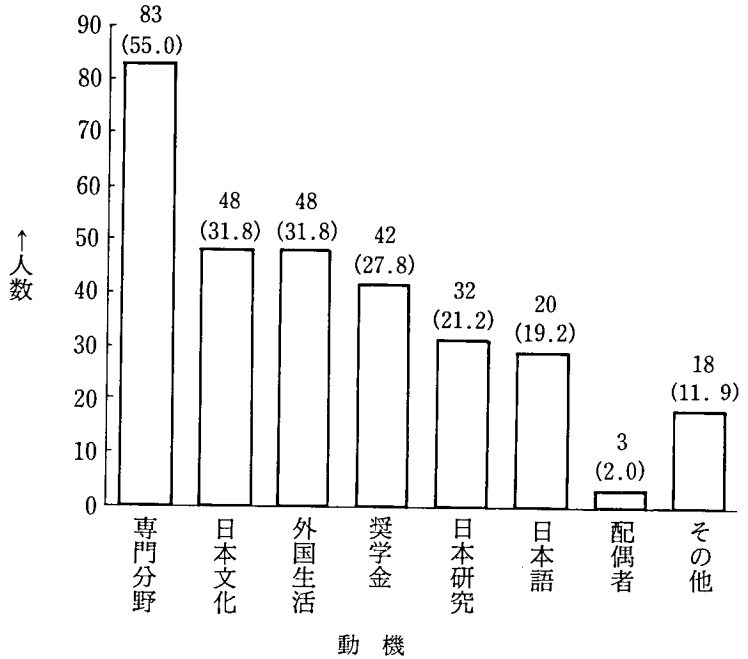


図5 日本に留学した動機

「あてはまる」として○をつけられた数を各項目ごとに合計し、多い順に並べた。回答は複数回答。数字は選択者数。全回答者(151人)に占める回答者の%。

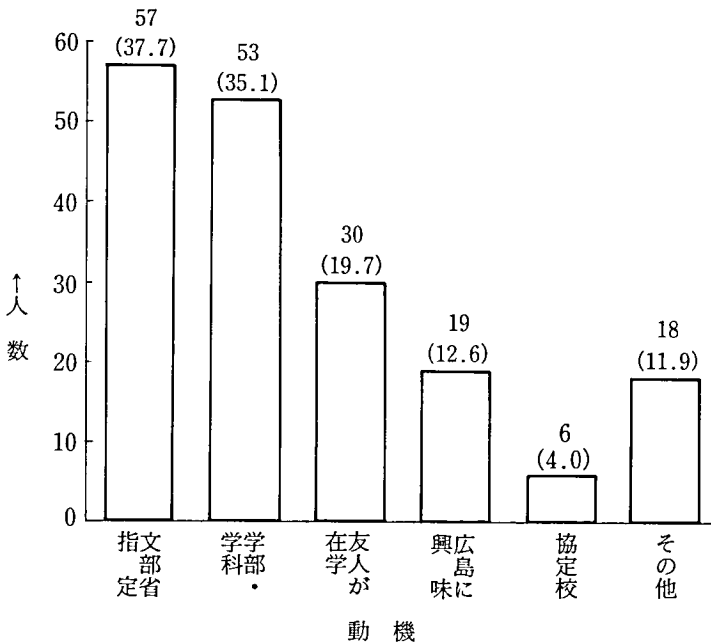


図6 広島大学に入学した動機

「あてはまる」として○をつけられた数を各項目ごとに合計し、多い順に並べた。回答は複数回答。数字は選択者数。全回答者(151人)に占める回答者の%。

は比較的低い。「奨学金がもらえたから」来たという動機が多くみられるのは、中東・アフリカの学生、研究生・院生、文部省奨学金や自国政府奨学金の受給者たちである。

広島大学への入学動機については図6に示す。複数回答の結果、「文部省に指定されたから」が最も多く、4割近い者が選択している。ついで多いのが「興味ある学部・学科・研究テーマ」(全体の約3.5割)、「友人・知人がいたから」(約2割)、「広島への興味」(1割余り)、「協定校だから」

表2-a 日本留学の動機と他の要因との関係

	日本語習得	日本研究	日本文化への関心	高レベルの研究	外国体験をしたい	奨学金が得られた	配偶者の渡日
性別							○
出身地域						○	
専攻	○	○	○				
学籍	○	○	○	○		○	
奨学金						○	○

χ^2 検定の結果、有意差 ($p < .05$) のみられた組み合わせを○で示した。

表2-b χ^2 検定で有意差のみられた要因における日本留学の各動機の選択頻度

要因	動機	カテゴリおよび選択者数 (カテゴリ内選択者頻度)				
性別	配偶者渡日	女性、 3(6.0)	男性 0(0.0)			
出身地	外国生活	中南米、 3(50.0)	東南アジア、 24(49.0)	中東アフリカ、 2(25.0)	東アジア、 16(21.6)	西欧 2(20.0)
	奨学金決定	中東アフリカ・中南米、 4(50.0) 3(50.0)		東南アジア、 21(42.9)	西欧、 3(30.0)	東アジア 11(14.9)
専攻	日本語習得	文科系、 18(33.3)	理科系 11(12.0)			
	日本研究	文科系、 27(50.0)	理科系 5(5.4)			
	日本文化	文科系、 24(44.4)	理科系 24(16.1)			
学籍	日本語習得	研究生、 19(27.9)	学部生、 1(14.3)	院 生 9(11.8)		
	日本研究	学部生、 4(57.1)	研究生、 19(27.9)	院 生 9(11.8)		
	日本文化	研究生、 31(45.6)	院 生、 16(21.1)	学部生 1(14.3)		
	外国生活	研究生、 42(61.8)	院 生、 38(50.0)	学部生 3(42.9)		
奨学金	奨学金決定	研究生、 25(36.8)	院 生、 17(22.4)	学部生 0(0.0)		
	奨学金決定	日本政府、 37(39.0)	自国政府、 3(30.0)	他奨学金、 2(5.9)	なし 0(0.0)	
	配偶者渡日	なし、 2(16.7)	他奨学金、 1(3.0)	自国政府・日本政府 0(0.0)		

数値はその動機を選択した人数、()内はそのカテゴリ内における選択者の割合。選択者の割合が大きい順に、左から並べた。

(約0.4割)である。一人平均1.23個の回答をしているが、単数回答者は122人いた。単数回答者の中では、「文部省に指定されたから」が51人と最も多く、ついで「興味ある学部・学科・研究テーマ」30人、「友人・知人がいたから」20人、「協定校だから」4人、「広島への興味」4人となっている。単数・複数回答のいずれにせよ「文部省に指定されたから」を選択した者は57人いたが、そのうちの約9割に当たる51人は、この項目のみをあげていた。また入学動機として「興味ある学部・学科・研究テーマ」を選んだ者53人のうち、これだけを選んだ者は半数あまりの30人である。なお「学部・学科・研究テーマ」を選ばなかった者96人(全体の64.4%)についてみると、半数あまり(51人)が「文部省に指定されたから」を、約2割(20人)が「友人・知人がいたから」を単数回答している。

表3-a 広島大学入学の動機と他の要因との関係

	興味ある 学部・学科	友人知人 が在学	文部省が 指定した	出身大学 が協定校	「広島」 への興味
性 別		○			
出身地域	○	○	○		
専 攻					
学 籍					
奨 学 金	○	○			

χ^2 検定の結果、有意差 ($p < .05$) のみられた組み合わせを○で示した。

表3-b χ^2 検定で有意差のみられた要因における広島大学入学の各動機を選択頻度

要 因	動 機	カテゴリーおよび選択者数 (カテゴリー内選択者頻度)				
		性別	友人が在学	女 性、 14(32.0)	男 性 14(13.9)	
出身地	学部・学科	中東アフリカ、 5(62.5)	東アジア、 33(44.6)	東南アジア、 11(22.5)	西 欧、 2(20.0)	中南米 1(16.7)
	友人が在学	東アジア、 24(32.4)	東南アジア、 6(12.2)	中東アフリカ・中南米・西欧 0(0.0)		
奨学金	文部省指定	中南米、 5(83.3)	西 欧、 7(70.0)	東南アジア、 25(51.0)	中東アフリカ、 2(25.0)	東アジア 16(21.6)
	学部・学科	な し、 8(66.7)	他奨学金、 15(44.1)	日本政府、 28(29.5)	自国政府 2(20.0)	
	友人が在学	他奨学金、 15(44.1)	な し、 3(25.0)	自国政府、 2(20.0)	日本政府 10(10.5)	

数値はその動機を選択した人数、()内はそのカテゴリー内における選択者の割合。選択者の割合が大きい順に、左から並べた。

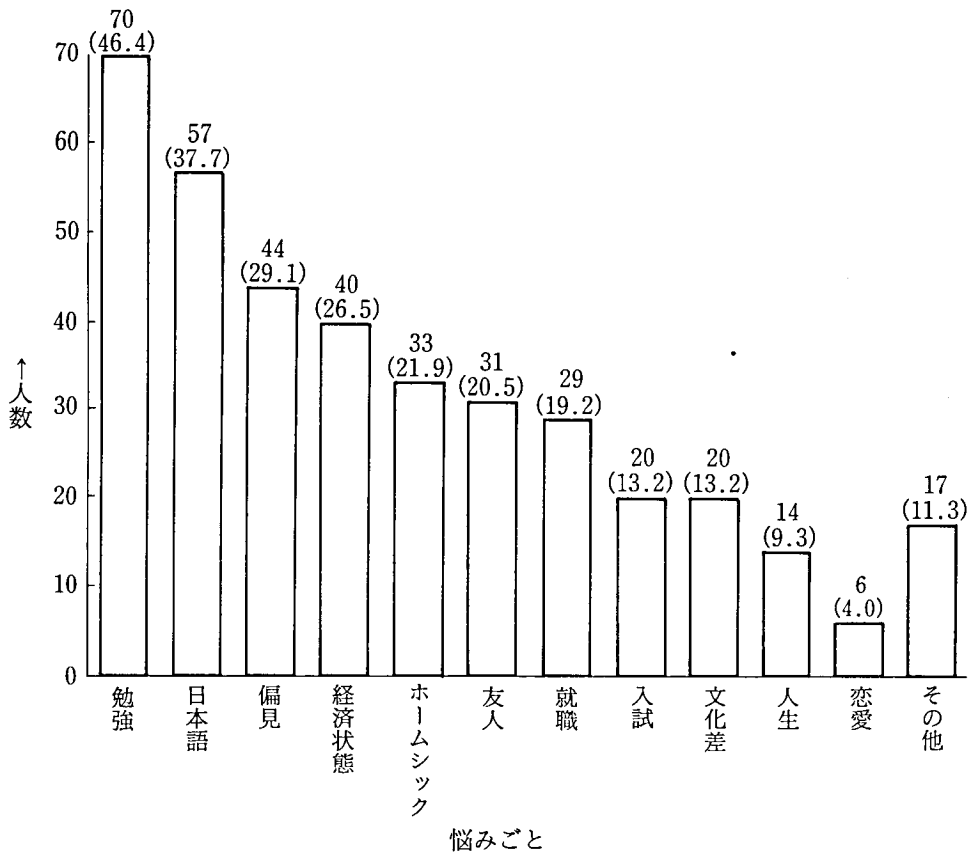


図7 現在の悩みごと

「悩んでいる」として○をつけた人数を各項目ごとに合計し、多い順に並べた。回答は複数回答。数字は選択者数。全回答者（151人）に占める回答者の%。

また、「その他」の動機（カッコ内は人数）としては、本国の指導教官の勧め(4)、広島大学が受け入れてくれた(2)、奨学金団体により指定された(2)、広島大学は国立大学で地位も高い1)、広島大学は国際的で留学生を受け入れてくれると聞いた(1)、などがあつた。

次にデモグラフィック要因と入学動機との関連を表3-aと表3-bに示す。「学部・学科・研究テーマへの興味」で入学したとした者は、中東・アフリカおよび漢字圏からの留学生に多く、「文部省に指定されたから」入学したとした者は、中南米と西洋からの留学生に多かった。なお「友人・知人がいたから」という動機は、漢字圏と東南アジアからの留学生だけにみられた。

現在の悩みについては、複数回答の結果1人2.59個の悩みを選択した。それぞれの悩みが選択された数を図7に示す。最も多く選択された「勉強」は、半数近くの者が悩んでいると答えた。次に多いのは「日本語」で4割近くの者が選んだ。続いて「偏見」が約3割、経済状態が約2.5割、ホームシックが約2割の順に多い。「人生」や「恋愛」は比較的少なかった。「その他」の悩み（カッコ内は人数）としては、食べ物が合わない(3)、卒業時の学力が心配(2)、気候(1)などがあつた。

表 4 - a 現在の悩みと他の要因との関係

	成績・研究・学位	入試	就職	人生の目的や意義	異性・恋愛	友人・人間関係	日本語	ホームシック	経済状態・バイト	文化習慣の違い	偏見や特別扱い
性別											
出身地域							○				
専攻				○							
学籍		○	○		○		○				
奨学金									○		

χ^2 検定の結果、有意差 ($p < .05$) のみられた組み合わせを○で示した。

表 4 - b χ^2 検定で有意差のみられた要因における各悩みの選択頻度

要因	悩み	カテゴリーおよび選択者数 (カテゴリー内選択者頻度)				
出身地	日本語	西欧、 7(70.0)	中南米、 4(66.7)	東南アジア、 24(49.0)	中東アフリカ、 3(37.5)	東アジア 17(3.0)
専攻	人生	文科系、 9(16.7)	理科系 5(5.4)			
学籍	入試	研究生、 17(25.0)	院生、 3(4.0)	学部生 0(0.0)		
	就職	院生、 19(25.0)	研究生、 10(14.7)	学部生 0(0.0)		
	恋愛	学部生、 2(28.6)	研究生、 3(4.4)	院生 1(1.3)		
奨学金	日本語	研究生、 36(52.9)	学部生、 2(28.6)	院生 19(25.0)		
	経済	なし、 6(50.0)	他奨学金、 15(44.1)	自国政府、 3(30.0)	日本政府 16(16.8)	

数値はその動機を選択した人数、()内はそのカテゴリー内における選択者の割合。選択者の割合が大きい順に、左から並べた。

悩みとデモグラフィック要因との関連について表 4 に示す。「日本語」についての悩みは西欧や中南米からの学生に多く、漢字圏からの学生には少ない。「入試」の悩みは研究生に、「就職」の悩みは院生に、また「恋愛」の悩みは学部生に多い。

日本への留学の動機および広島大学への入学の動機と、現在の悩み、留學生活の満足度、健康状態の評価との関連を表 5 および表 6 - a から表 6 - c に示す。動機として「配偶者の渡日」を選んだ者は 3 名と非常に少なかったため解析からはずした。「奨学金が得られたから」という動機を選択した者は、しなかった者より「文化差」や「ホームシック」に

表5 日本留学動機と現在の悩みとの関連

日本留学動機	有 無	現在の悩み										
		成績	入試	就職	人生	恋愛	友人	日本語	ホームシック	経済	文化差	偏見
日本語習得	○ ×							16(55.2) 41(33.6)				
日本研究	○ ×				-		11(34.4) 20(16.8)					
日本文化への関心	○ ×	27(56.3) 43(41.8)	10(20.8) 10(9.7)					25(52.1) 32(31.1)				9(18.8) 35(23.2)
高レベルの研究	○ ×				4(4.8) 10(14.7)				11(13.3) 22(32.4)			
外国体験をしたい	○ ×			13(27.0) 16(15.5)	-				17(35.4) 16(15.5)			
奨学金が得られた	○ ×								14(33.3) 19(17.4)		9(21.4) 11(10.1)	

各動機をある者とない者の2群にわけ、そのなかでさらに各悩みのある者とない者の群に分け、その人数について4群間で χ^2 検定を行い、 $p < .10$ で差の認められた組み合わせについてのみ表した。

上段：その動機が「あった」と答えた者(○)のうち、その悩みが「ある」と答えた者の人数(%)。

下段：その動機は「なかった」と答えた者(×)のうち、その悩みが「ある」と答えた者の人数(%)。

それぞれ割合の高い方を太字にしてある。なお-は、回答数が十分に多くなくて検定できなかったことを示す。

関して悩む割合がより高い。「高レベルの研究」をあげた者は、あげなかった者より「ホームシック」に悩むことが少なく、「日本の文化・社会への関心」をあげた者は、あげなかった者より「偏見」に悩むことが少ない。また「日本語」や「日本文化」への関心をあげた者は、あげなかった者より「日本語」の悩みがより多い。「日本文化」や「日本研究」など、日本に直接関連した来日動機を持つ者の方が、留學生活の満足度が高い。「研究レベル」に引かれて来日したり、「学部・学科・研究テーマ」にひかれて入学した者たちは、そうでない者たちに比べて健康状態が比較的よい。「文部省が指定したから」広島大学へ入学したという者は、健康状態が比較的よくない。「成績・研究・学位」といった勉強面の悩みや、人間関係の悩みがある場合、健康は比較的よくない。そして「友人・人間関係」、「文化習慣の違い」、「偏見」、「ホームシック」などの異文化適応面に悩みを持つ場合は、留學生活の満足度が低いという結果となっている。

ついで表7に、年齢、滞日年数、日本語力、経済状態、悩みの数、健康状態、問題の重大さ(各問題の重要度の評定を合計したもの)について、各項目間の相関を示した。滞日年数と日本語力、および健康状態と満足度の間には正の相関がみられた。日本語力の低さや滞日年数の少なさは、悩みの数の多さおよび問題の重大さと相関がみられた。悩みの数が多いことはまた、健康状態の悪さや全体的満足度の低さと関連があった。経済状態の悪さは、悩みの数の多さや問題の重大さの増加、満足度の低下と関連があった。

表 6-a 日本留学動機と留学生活における満足度・健康状態との関係

	留学生活の満足度	健康状態のよさ
日本語習得		
日本研究	○	
日本文化への関心	(○)	
高レベルの研究		(○)
外国体験をしたい		
奨学金が得られた		
配偶者の渡日		

各動機を選択した者(○)としなかった者(×)の間でt検定を行い、 $p < .05$ および $p < .10$ (カッコつき)で有意に高かった方を表中に記号で示した。

日本の大学と自分の国の大学について「最も違うこと」を自由記述したもののについて、そのカテゴリーをKJ法でまとめたものが図8である。具体的内容としては、たとえば「設備^{A-1}」では、「日本の大学は研究や実験の設備・施設がよく整っている」とした意見が多かった。「学生寮^{A-2}」では「日本の大学は24時間立入ることができるのでよい/学生のための控室があるのでよい/自治の雰囲気があるのでよい」などがあつた。「言葉の問題^{B-1}」では「日本では日本語で授業が行われる」や「本国では媒介言語としての英語の比重がもっと高い」が、また「文化の違い^{B-2}」では「コミュニケーションの様式が違う」などがあつた。「差別^{B-3}」については、「日本の方が男女差別がある」といった記述や、「母国では自然に学生として振る舞えたが、ここでは外国人学生として扱われる」といった記述がみられた。「外国人留学生の数^{B-4}」

表 6-b 広島大学入学動機と留学生活における満足度・健康状態との関係

	留学生活の満足度	健康状態のよさ
興味ある学部・学科		○
友人知人が在学		
文部省が指定した		×
出身大学が協定校		
「広島」への興味		

各動機を選択した者(○)としなかった者(×)の間でt検定を行い、 $p < .05$ および $p < .10$ (カッコつき)で有意に高かった方を表中に記号で示した。

表 6-c 悩みごとの有無と留学生活における満足度・健康状態との関係

	留学生活の満足度	健康状態のよさ
成績・研究・学位		×
入 試		
就 職		
人生の目的や意義		
異性・恋愛	(×)	(×)
友人・人間関係		
日 本 語	×	
ホームシック		
経済状態・バイト	×	
文化習慣の違い	(×)	
偏見や特別扱い		

各悩みを選択した者(○)としなかった者(×)の間でt検定を行い、 $p < .05$ および $p < .10$ (カッコつき)で有意に高かった方を表中に記号で示した。

表7 各項目間の相関

	年 齢	滞日年数	日本語力	経済状態	悩みの数	健康状態	問題の 大きさ	留学生活 の満足度
年 齢				-				
滞日年数			+		-		(-)	
日本語力					-		-	
経済状態					-	(+)		(+)
悩みの数						-	+	(-)
健康状態								+
問題の大きさ								

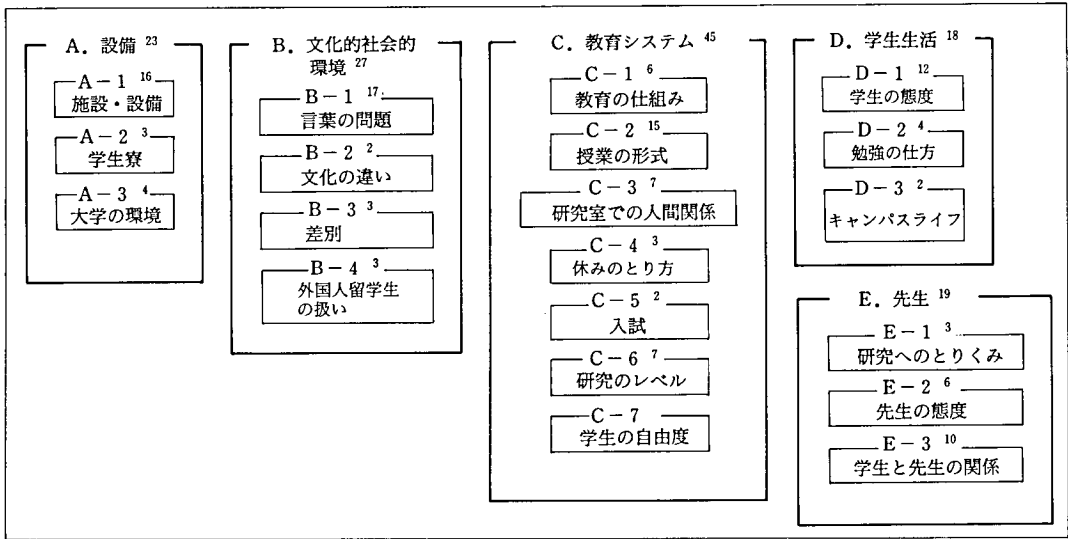
相関の有意性の検定の結果、 $p < .05$ および $p < .10$ （カッコつき）で有意な組み合わせについてのみ、正の相関は+、負の相関は-として表した。

では、「日本の大学の方が留学生数が多い」と述べたものがあった。

「教育の仕組み^{C-1}」では「本国では研究室に4年生を配置しない」や「日本では先生と個人的に接しやすい」など、「授業の形式^{C-2}」では「日本の大学は宿題が少ない」、「本国では先生の教えを受け入れるのに対し、日本では学生が自力で学ばねばならない」、「日本の大学院では、授業が重視されない／学ぶというより実験ばかりさせられる」、「日本の方が／本国の方が、授業が難しい」などがあった。「研究室の人間関係^{C-3}」については「日本の大学院では、人間関係がわずらわしい／何でも研究室単位でやる」、「休みの取り方^{C-4}」については「日本は休講や休校の日が多い」、「入試^{C-5}」については「日本の大学院入試はやさしい／やり方が違う」、「研究のレベル^{C-6}」では「日本の大学はレベルが高い／研究テーマが新しい」、「学生の自由度^{C-7}」では「日本の大学では研究テーマが自由に選べる／学生が自由すぎる」などがあった。「学生の態度^{D-1}」では「日本の学部生はあまり勉強しない」、「日本の学部生は遊んでいるが、院生は大変忙しい」などがあり、「勉強の仕方^{D-2}」では「日本では用がなくても長時間学校にいる／家で勉強しない」、「キャンパスライフ^{D-3}」では「日本の大学はアクティビティが少ない」などがあった。「研究へのとりくみ^{E-1}」では「日本の先生はよく研究している／授業より研究を重視している」、「先生の態度^{E-2}」では「日本は先生が親切である／親切でない」などがあり、「学生と先生の関係^{E-3}」では「日本の先生の方が友達のようにつきあえる／つきあえない」や「日本では学生が先生をより尊敬している／していない」などがあった。

広島大学に望むことについての記述を、おおまかにまとめると表8のようになる。そのうち、特に興味深いものや内容が多岐にわたるものについて以下に述べてみる。教育研究面の「日本語教育の充実¹⁻¹」には、日本語に関する授業の数や種類を増やすこと、各専門

図8 日本の大学と自分の国の大学を比較して最も違っていること



AからEは各カテゴリーを、右肩の数字は回答者数をあらわす。

分野の日本語に関する教育の重視、より系統的に教えられることへの希望などが、また「日本の文化や習慣についての教育¹⁻⁴」には、日本のさまざまな文化、日本人の本当の生活、日本の社会常識などを知る機会がほしいといった希望が、そして「図書館¹⁻⁷」に対しては、図書館の開館時間の延長や、蔵書数の増加、特に洋書の充実を望む声があった。環境・条件整備面の「留学生のための宿舎の確保²⁻¹」に関しては、宿舎が確保しにくいことを留学生への差別の現れと併記したものもあり、確保の仕方としては「安い下宿の斡旋」または「大学の寮への収容」を望んでいるが、「留学生寮」に限らずに「日本人学生と一緒にの寮」に入れてほしいといった希望がみられた。また「英語が通じる環境の提供²⁻²」では、「授業では英語を使ってほしい」、「事務書類は日英併記に」、「英語のできるスタッフをおく」などの要望がみられた。「日本語は国際語ではないのだから」それらが必要であるという理由を付記した者もいる。また「専門分野での英語の本やマニュアルを充実させてほしい」とか、非英語圏からの留学生の中には「大学院での英語教育を実施してほしい」と希望する者もいた。「大学周辺の整備²⁻³」への要望では、広島大学の2つのキャンパスのある広島地区と東広島地区（前地区より後地区へ統合移転中）を比較して、おもに東広島地区で、交通が不便、大学周辺に店や銀行などが無い、レクリエーションに行くところがないといった指摘があり、「西条（東広島地区）をもっと開発し、大学にもっと興味を持ってもらうようにしてほしい」とか「広島市内や市内から遠くない郊外に、新しい広島大学をつかってほしい」という要望もみられた。また、「大学内の整備²⁻⁵」では、「駐車場の整備」「スクールバスの設置」「美観に優れたキャンパス」などへの要望がみられた。

表8 広島大学にのぞむこと

内容の区分	内 容
1) 教育研究	<ol style="list-style-type: none"> 1. 日本語教育プログラムの数と内容の充実 (25) 2. 高いレベルの教育をする (13) 3. 博士号をもっと出す (12) 4. 日本の文化や習慣についての教育をする (12) 5. 勉強・教育のための部屋や機器などの条件整備をする (11) 6. 指導教官による指導をよりよくする (2) 7. 図書館の運営と内容を充実させる (4)
2) 環境・条件整備	<ol style="list-style-type: none"> 1. 留学生のための宿舎を確保する (24) 2. 英語が通じる環境を提供する (15) 3. 大学周辺を整備する (10) 4. 食堂の運営と食事内容を充実させる (9) 5. 大学内を整備する (7)
3) 交流・対人関係	<ol style="list-style-type: none"> 1. 国際交流を推進する・国際性を高める (19) 2. 日本人との交流のための諸活動をする (19) 3. 留学生への差別・特別視をやめる (8) 4. 留学生にもっと親切にする (6)
4) その他	<ol style="list-style-type: none"> 1. 留学生の意見を聞く (13) 2. 奨学金制度を充実させる (12) 3. 就職のためのガイダンスと斡旋をする (3) 4. チューター制度を改善する (2) 5. 入試についての情報提供をする (2)

カッコ内はあげた人数を表す

交流・対人関係面での「国際交流の推進³⁻¹」では、「卒業後母国の大学との研究協力の仲立ちをしたい」、「日本からの留学生も、自分の国へ送ってほしい」、「卒業後も広島と連絡を保つために自分が何らかの役割を果たしたい」という希望が、また広島大学に対しては「途上国への援助に積極的な役割を果たす大学になってほしい」、「国際的な考え方・やり方の大学になってほしい」、「外国との学生・スタッフの交換制度を保ってほしい」といった希望が述べられていた。「日本人との交流³⁻²」に関しては、特に東広島キャンパスでのスポーツを通じた交流を希望する声が多かった。「留学生に対する差別・特別視³⁻⁴」については、「留学生ではなく学生として見てほしい」、「日本の学生と同じように扱ってほしい」といった外国人に対する特別扱いを指摘したものと、「東南アジアの学生と西洋の学生を同一にみてほしい」といった差別的扱いを指摘したものとがみられた。「留学生への接し方³⁻⁵」という点では、「先生がもっと留学生に親身になってほしい」といったものや、「一部の事務の人の対応が冷たい」などと述べたものもみられた。全体を通して、日本語

育の充実、住居の確保、国際性の向上、日本人や日本人学生との交流を望む声が多かった。

< 考 察 >

外国へ留学する動機として最も一般的なものは「自国よりも進んだ学問や技術を身につけたい」とか「異なった文化や社会への興味・関心」であろう。その意味では日本への留学の動機として「専門分野のレベルや研究内容がよかったから」が最も多く選ばれ、「日本の文化や社会への興味があったから」を次に多くの者が選んでいるのは自然かもしれない。日本への留学の動機として「日本語の習得」をあげた者は約20%であるが、これを多いとみるか、少ないとみるかは意見の分かれるところであろう。日本からアメリカへの留学の動機のなかでは「言語の習得」が大きな比重を占めていることが報告されている（山本、1986）が、日本語の場合は英語ほどではないにしても、「日本や日本語に関する研究をしたかった」とか「日本の文化や社会への興味があった」を選択した者の割合や、複数回答式であることなどを考え合わせれば、その割合は決して高いとは言えない。その理由としては、日本語の習得が非常に困難であることもあげられようが、「日本語は国際語ではないので、大学はもっと英語を取り入れるべきだ」といった回答（自由記述）からもうかがえるように、日本語の有用性を低く評価していることもあると思われる。こうした評価が日本語習得のブレーキになっていることもあるかもしれない。

次に広島大学への入学動機で最も多く選ばれたのは「文部省に指定されたから」（37%）であった。この動機を選択した者が4割近くいたことは注目に値するが、更に興味深いのは「文部省による指定」を選択した57人の内の約9割にあたる51人は、複数回答であるにもかかわらず、ほかの理由を選んでいないことである。このことの原因としては日本の大学についての情報が入手しにくいことや大学を決定するシステム上の問題が考えられる。

また、日本留学の動機として、欧米からの留学生は個人的関心をあげることが多いのに対して、アジアからの留学生は便宜上の理由から来日することが多いといった違いがあると言われているが、本調査の結果もそれを裏付けている。アジア、特に漢字圏の国からは、知人を頼ってくるケースが多いようである。

さて、来日の動機と現在の悩みとの関係から示唆されることであるが、日本という国を積極的に選択する理由があった者に比べて、「奨学金に受かったから」とか「どこか外国に行きたかったから」といった、いわば受動的な動機で来日した者は、日本への“とけ込み方”がいくらか不十分なように見受けられる。「日本語の習得」、「日本の文化や社会への興味があった」、「日本や日本語に関する研究」といった、“日本”に関連した動機で来日した者の場合は、真剣に日本にとけ込もうとするが故に生じる悩みがあるように思われる。

留学および入学動機の留學生活との関連を見てみると、研究面に注目して来日・入学した者が、健康状態もよく留學生活をのりきっている。悩みとの関係を見ても、学習・研究

面の悩みがあると健康状態が良くない。ということは、研究を第一義とする留学生活にとって、まさに研究の進行状況が適応の良好さのカギという示唆であろう。

留学および入学動機と、留学生活に対する満足度との関係を見ても、日本そのものへの関心の高い者のほうが満足度が高い。このことは日本についての関心の有無と留学生活への満足度との間に関係があることを示唆している。悩みとの関係を見ても、異文化適応面で悩んだ者は日本留学への満足度が低くなっている。ホームシックなどの精神面、差別・偏見など文化的側面での不適応が留学生活に否定的な影響を及ぼすことを示唆している。

出身国の大学と日本の大学との違いについての記述をみると、設備や教育システムから学生生活にいたるまで、さまざまな違いが述べられているが、これらは、彼らが日本の大学において何に戸惑うのかについて理解する手がかりを与える。広島大学に対する留学生たちの要望をみると、一大学として対応できるものから、留学生政策レベルの問題までさまざまな次元のものが出されている。日本の大学側の問題としてとらえられるものもあるが、留学生の側の問題と考えられるものも少なくない。日本語力が不十分であることが、留学生の特定の面でのニーズ（たとえば英語による教育や英語による事務的対応の要求、洋書を充実させるといった要求）を引き起こしているように見受けられる。日本の大学はそれにどう対応しようとするのであろうか。英語の比重の高い研究体制もまた、洋書の充実や教育・研究での英語のニーズ（授業を英語とする、非英語圏からの留学生向けに英語の授業をする）に結び付いている。日本語をまったく用いずに英語のみで教育・研究を行う工学部の「特別コース」のような試みもあるが、こういった試みに対しては賛否両論ある。大学の国際化をのぞむ声には耳を傾けたいものもある。たとえば、留学生が実際の架け橋となって貢献したいといった意欲が生まれることこそ、まさに国際交流の賜ではないだろうか。ただ、馬越（1991）が日本の大学の異文化性と呼ぶような、複雑な入学者選抜方法、貧困な「学部」教育、大学院の閉鎖性、文科系博士の学位の取得しにくさといったわが国の大学の実態を、どこまでどのように改善できるのかは難しい問題である。

広島大学独自の問題としては、現在進行中のキャンパス移転にともなう不便さがあるが、これは留学生に限らず、日本人学生にとっても問題であろう。ただ、留学生の要望などから察するに、留学生は移転計画について十分な情報を提供されていないのではないかとという懸念がある。特に留学生の場合は、日本人学生に比して情報収集の点で非常に不利な状況にあることを認識する必要があるだろう。

留学生としてではなくただの学生として見てほしい・扱ってほしいという希望は、日本にとけ込みたい学生の場合ほど切実であろう。こういった要望は分離主義と統合主義（江淵，1991）のはざままで、日本の大学が従来あまりにも分離主義的に対応してきたことを反映している。この問題は江淵（1990,p.83）が警告しているように、“裏カリキュラムの存在”という二重構造を容認するものであり、「体系化された教育システムの整備と評価システムの確立という大学の国際化の最も重要な課題性を曖昧に」してしまいかねない重大

な問題である。

日本人学生あるいは日本人一般との交流へのニーズや、日本のことをもっと知りたいという希望もあげられている。こういった要望への対応としては「日本文化」や「日本事情」に関する授業を充実させることも一つの方法であるが、留学生センターが主催して定期的に行っている茶話会の「インターナショナル・ティータイム」も、こういった要望に応じて留学生と日本人学生や教職員との交流を促進すべく企画されたものとして活用できる。また、学生レベルの交流企画の活発化も望まれるが、いかに企画の便宜をはかっていくかが課題であろう。母国と比べて大学内のアクティビティが少ないという指摘はかなり多くなされているが、現在のアクティビティの情報がきちんと伝わっているかにも疑問はある。ともあれ、課外活動へ留学生が参加しやすくしていくことも考えなければならない。留学生のニーズは一大学が対応できるものから留学生政策レベルのものまで多様であり、各レベルでの一層くわしい検討が待たれる。

参考文献

- Diggs, N. & Murphy, B. 1991. Japanese adjustment to American communities : The case of the Japanese in the Dayton area. *International Journal of Intercultural Relations*, 15, 103-116.
- 江淵一公 1991. 「在日留学生と異文化間教育－研究の視点と課題」『異文化間教育』 5, 4-20.
- 江淵一公編 1990. 『留学生受入れと大学の国際化－全国大学における留学生受入れと教育に関する調査報告－』 広島大学大学教育研究センター.
- 広島大学学生委員会・厚生委員会 1991. 『広大生はいま－統合移転と学生生活・第一回学生生活実態調査』 広島大学.
- 岩男寿美子・萩原滋 1988. 『日本で学ぶ留学生－社会心理学的分析－』 勁草書房.
- 文部省学術国際局留学生課 1991. 『わが国の留学生制度の概要』
- 田中共子・田畑佳則 1991. 「外国人留学生の日本生活における問題－留学の動機および満足度との関係－」『中四国教育学会紀要』 37. (印刷中)
- 馬越 徹 1991. 「異文化接触と留学生教育」『異文化間教育』 5, 21-34.
- 山本多喜司 (研究代表者) 1986. 『異文化環境への適応に関する環境心理学的研究』 昭和60年度科学研究費補助金 (一般研究B) 研究報告書.